

昭和五十九年十一月十一日(三)第一三五五番

第一三五回

史跡めぐり資料

平塚城址  
飛鳥山  
金剛寺  
三王詣御神社  
王子神社  
金剛寺  
西福寺

越谷市郷土研究会

山田政信

第一三五回 史跡めぐり案内

とき 昭和五十九年十一月十一日(日)

集合 越谷駅前 午前八時〇〇分集合

午前八時二十六分発

行先 北區上中里 — 王子 — 滝野川 — 豊島

コース 越谷東武 — 北千住国電 — 日暮里国電 — 上中里

平塚城址 — 西ヶ原一里塚 — 飛鳥山 — 金輪寺 —

王子稻荷神社 — 昼食

王子神社 — 金剛寺 — (バス) 滝野川三丁目 — 西福寺

王子国電 — 日暮里国電 — 北千住東武 — 越谷

案内者 山田 政信

会費 二、五〇〇円 (交通・資料・保険料・入館その他)

但し 昼食は各自持参

越谷市東越谷4-19-1

市立図書館内

越谷市郷土研究会

## 豊嶋氏の遺跡をたずぬて

平安末期から室町中期までの約400の年間、南武蔵の地に武蔵を侍こつてきた豊嶋氏も、文明九十年、上杉氏に仕えた太田道灌によって滅ぼされます。

豊嶋氏の支配が終つてからのち、後北条氏の登場するまでの約50年間、豊嶋氏の旧所領特に北區の丁史は不明なことだらりである。一説に太田道灌の支配下するゆへ、崩谷上杉氏の所領となつた（新修北區史ほか）というが、どうも違つらしい。太田氏の支配下となつたところもあるが、その大半は、千葉氏の所領、また豊嶋一族の庶流の武士団が千葉氏の支配下におかされていたと考えられる。

豊嶋氏の所領の一部、一族の赤塚氏の居城地へ、千葉自胤が入城し、石浜城へは、千葉実胤が入城した。この自胤および実胤は、長尾景春の乱に、太田道灌の旗下に属して各地を転戦した。とりわけ道灌は、この二人の古河公方攻めなどの功績を賞讃している。豊嶋氏旧所領内の内子田および袋という北區の入間川に沿つた地帯が千葉氏の所領であつたことを伝えている。また千葉実胤から、松月院に宛てて、谷田・子田・袋の地の寄進状が発給されていふことも伝えている。これは赤塚城・中曾根城・石浜城を結ぶ入間川沿いに、千葉氏が所領を得たことを物語るものではなからうか。少くとも千葉氏は、北区内の豊嶋氏旧領の一部を所領したと推定されるのである。

今回、こうした千葉氏と関係の深い豊嶋氏の遺跡をたずぬることも、郷土研究会の千葉氏の研究の一環として、企画したものであります。

## 豊嶋氏の興亡

### 秩父氏の繁栄

豊嶋氏は秩父氏の一族である。そして秩父氏は良文を遠祖とする桓武平氏の有力な一門である。良文は桓武天皇の皇孫高望王の五男に当る。良文の子の忠頼は、武蔵国村岡（埼玉県大里郡吉岡村）に住したが、平将門の乱に功をあげ、武蔵押領使兼陸奥守となり、その長子の将常は、武蔵権守となつて、武蔵国秩父郡中村郷（埼玉県秩父市）に住し、秩父氏を名乗つた。秩父から荒川一帯にわたる開拓はもとより、秩父は馬の産地で秩父牧という国の牧があり、一族は武蔵野一円にしだいに分布し、荒野を開拓して勢力を誇つた。

その秩父氏からは豊嶋氏をはじめ葛西、畠山、河崎、渋谷、河越、江戸、小山田、稲毛、榛谷の各氏が関東の各地に進出し、鎌倉幕府開闢の大きな力となり、鎌倉幕府となつては、守護・地頭となつて諸国に任じ、それぞれの地に、武蔵武士の血脈を残すに至つた。

### 豊嶋氏の発祥

豊嶋・葛西両氏も、またこの秩父氏の一族から出た。秩父将常の二子武常は、秩父六大夫といつたが、早く秩父を出て、当時利根川河口の汝地武蔵国豊島郡を開拓して、地名を名字として豊嶋氏を名乗り、また下総国葛西（葛飾郡の内）を領して葛西氏と称したのである。

武常は、葛西左衛門尉と称し源頼義に従つて、奥州に転戦して軍功があつた。その子の常家は豊嶋二郎と称し、おなじく近義は、豊嶋太郎と号し、豊嶋城を築きこれに居住したという。孫の康家は一説には近義の子ともいわれ豊嶋太郎といつた。この康家の三子が清光で、長じて武蔵権守に任じ、豊嶋権守と称した。康家・清光の時になつて、豊嶋・葛西両荘の基礎は確立し、南武蔵の一大勢力となつた。

### 豊島荘

豊嶋氏の最初に拠つた所は、豊島郡であり「和名抄」に見える豊島の馭の地で、郡家のおつた所であろうと想像される。しかし、康家・清光の時代における豊嶋氏の館のあつた所は、入間川の沿岸の豊島の地、すなわち現在の北区豊島町であるといふのが、従来の説である。この地は当時の入間川の河口に近く、案外水捌けがよくて、沖積地の肥沃な土地であつたろうと思われ。付近には、古墳遺跡などもあり、この豊嶋の地に、莊園の中心である館を営んだとしても当然のことである。しかし、この地は、当時の交通路から離れすぎ、古墳の多いことは、館の位置でないことを裏書きするものである。館は、すなわち、北区上中里町平塚神社付近であろうとする説は、はなはだ有力なものである。いずれにしても、豊島荘は入間川沿岸と石神井川の流域を占め、現在の台東・文京・北・荒川などの各区に属する所が、大体それで、豊島・板橋・練馬各区の方面に、時代とともに伸展していつたものと思われ。また、さらに東方に発展して、隅田川を越えて、そこに葛西荘が営まれた。葛西は当時隅田川が国境で、下総国に属していたが、のちに武蔵国に移管されて南葛飾郡となつた。現在の葛飾・墨田・江東・江戸川の

各區である。それゆゑ、武常以来、この一族は、あるいは豊嶋氏を称し、あるいは葛西氏を称したのである。

莊園には名義上の領主を、ただくのを常としたが、葛西の地方は、これを伊勢大神宮に奉納したので「葛西の御厨」と呼ばれた。またの豊島莊の方は、新熊野社を本家と頼んだのである。

### 頼朝の創業と豊嶋氏

治承四年（一一八〇）九月三日壬子、「よつて御書を小山四郎朝政・下河辺庄司行平・豊嶋権守清光・葛西三郎清重等に遣はさる。これおのおの志あるの輩を相諮らひて参向すべきの由なり云々」とあり、（吾妻鏡卷一）。このように頼朝からは信頼されていただけ、またその機を得ないうちに、頼朝は隅田川を渡つて、武蔵國に進んで長井に陣をとつたので、清光はその子清重を引き連れて、その陣に参じた。

鎌倉時代、建仁元年（一一三一）清光の長子朝経は、土佐國守護となる。また、朝経の子有経は、豊嶋権守と称し、八条院領紀伊國三上左の地頭となる。

南北朝時代を経て、室町時代となり

応永二十三年（一四一六）、鎌倉公方持氏と関東管領上杉氏憲（後に禅秀）との乱には、豊嶋（範泰）・江戸・高山等は持氏を支持したので、鎌倉を遣はれたが、禅秀の死によつて乱が治まつてから復帰した。

## 長尾景弼

上杉氏は、山内・扇谷の両家に分れ、相拮抗していたが、山内上杉の執事職の長尾景信が死んだので、景信の子の景春は、当然そのあとをつぐものと思つていたのに、山内顯定は叔父の忠景を任命した。これを不満とした景春は、仇敵の古河成氏と通謀し、文明九年（一四七七）正月、武蔵国鉢形城に拠つて兵を挙げ、景春の鎮座に出張つた扇谷定正と山内顯定の五十五の陣（一本庄市東五十五）を襲撃した。定正・顯定らは上野国に敗退し、駿河に出征していた太田道灌に急を告げて、景春を討たせることにした。

## 豊嶋泰経・道灌と対抗

その当時、石神井・練馬両城の城主を豊嶋勘解由左衛門尉泰経といつた。そしてその妻は景春と足跡であつたから、景春が事を挙げると、泰経がこれに応じて立つたのである。すなわち、平塚城には弟の平右衛門尉泰明を配し、平塚・練馬・石神井の三城を東西に連ね、戦備を固め、道灌の川越・岩槻と江戸城を結ぶ南北の連絡を断切つた。

文明九年四月十三日準備の調つた道灌は、江戸城から出兵して、まず平塚城を攻撃した。しかし、城兵よく防ぎ戦つて、たやすく抜くことができやうもないので、城下に火を放つていつたん引き上げた。この報に接した泰経は、石神井・練馬両城の兵を率いて、平塚城の後詰として進撃してきた。道灌は上杉朝昌・千葉自胤らとともに、たちまち矛を転じてこれを迎え、多摩郡江古田・沼袋原（中野区江古田町・沼袋町）において、一大遭遇戦となつた。鎬を削る決死の奮戦のすえ、武運拙く豊嶋勢の敗北となつて、泰明以下校橋・赤塚らの一族をはじめ多数の戦死者を出すに至つた。泰経はかろじて血路

を開き、石神井城に引上げた。

道灌はこれを追つて、城の南方石神井川を隔てた愛宕山に陣を布き、包圍攻撃した。攻防戦数日、ついに十八日には泰経は降参して、城の要害を破壊することを条件として和議が成立した。しかし、道灌は囲みを解かず、城中の形勢をうかがつていたが、その条件が実行されないのを見て、二十八日ふたたび兵火を開いて外城を攻め取つたので、城兵は夜にまぎれて没落した。練馬城も、月日は明らかではないが、これと前後して陥落したものと思われる。

### 豊嶋氏の没落

道灌は、そのご北武蔵や、上州方面に転戦していたが、翌十年（一四七八）正月には古河成氏と和議が成立したので、河越城に帰つた。そして余端を保つていた平塚城を、ふたたび攻めてこれを落した。「鎌倉大草紙」には、ここを逃れた泰経は、小机城に拠つたと記しているが、詳細不明である。

ここに平安朝以来数百年間、南武蔵に名族として、近隣を風靡した豊嶋氏も、ここに滅亡し、その旧領は太田氏の支配下、千葉氏の所領、千葉氏の支配下の豊嶋一族の庶流の武士団の所領となつた。また、石神井城・平塚城の落城後、生きのびた一族は小田原の北条氏、ついで徳川氏に仕えて、その子孫ものこしている。

### 豊嶋氏の支族

赤塚氏と赤塚城



豊嶋一族の中で、赤塚氏は有力だつたと思はれるが、豊嶋氏の「系図」の上では、その系統がはつきりしていない。ただ赤塚左近蔵人資政のことは、鎌倉時代の記録にどこどこで見ることが出来る。もちろんその居所の赤塚の名をとつて名乗つたのであろう。その城址は、板橋区の郷土資料館の背後であらうといわれる。子孫も永くこの地に居住したと思はれるが、勢力を失つて康正二年（一四五六）には、千葉氏が、この赤塚の領主となつてゐる。文明九年豊嶋氏と太田氏との戦いに、その戦死者の中に、赤塚とみえるのは、この一族のものである。

### 滝野川氏と滝野川城

金輪寺本系図によると豊嶋太郎重信の子宮城八郎重中の二男信久が滝野川大夫五郎を名乗り、久吉、久道、豊明と続くところがある。鎌倉中期に分立した庶流で、その居城は金輪寺付近の丘をいい、石神井川の右岸に位置する。「王子町誌」では、滝野川豊明の城館址として紅葉寺付近の丘と記してゐる。しかし、この一族の事蹟は明らかでない。

### 志村氏と志村城

滝野川久信の子久村が志村七郎を名乗り、板橋区志村の熊野神社一帯に城郭を構えた。「吾妻鏡」の記録の中にもその名が見える。志村氏はその後、戦国末期にまで及んでゐる。板橋区と板橋城

滝野川豊明の弟に板橋二郎豊清というものがある。板橋に在住したものと思はれるが、滝野川氏同様、その尸史は伝承がない。板橋区の東山とか加賀屋敷地などが城址といふが判然としない。

## 平塚城址

豊嶋近義が、平安末期に築いたという平塚城は、また豊島城と云つて、その址は、確証はないが、古来北区上中里町平塚神社付近と伝えられている。今、社のある所を一郭とし、その東方の台地は、昔は現在よりずっと北方に突き出たので、そここが城の中心であつたと推定される。

城址と推定される場所は、荒川流域に臨んだ、飛鳥山から道灌山に続く丘陵の上で、二十メートルに近い断崖をなしており、南方には駒込の台地との間には谷戸川を控えているから、城を構えるのには、もつとも適当な要害の地である。

文明九年（一四七七）四月、太田道灌はこの城を攻め、城下に火を放つて、そのまま引返し、石神井城から進撃してきた豊嶋泰経と、江古田・沼袋で戦つた。そして同月二十八日には、石神井城を攻略した。翌文明十年正月に至つて、道灌は再度平塚城を包圍し、攻め落した。



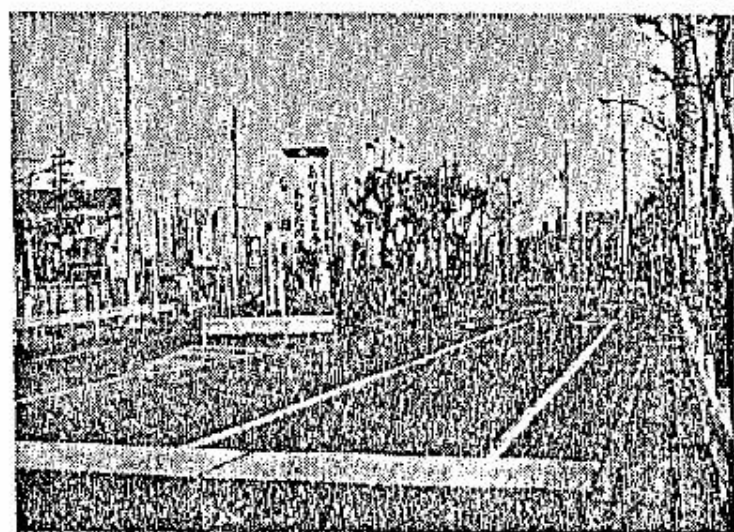
## 平塚神社

平塚城址の中心と、普通にいわれている場所にあるのが、この平塚神社である。後三年の後の後、源義家・義経・義光兄弟が京都へ帰る途中で、平塚城に逗留し、城主の豊嶋（近義）氏の厚遇を喜び鎧一領と御守本尊十一面観音の像を与えた。その後、元永年中（一一八〇）豊嶋氏は城の鎮護のためにその鎧を城内に埋め、その上に塚を築いた。それが今の甲冑塚で、塚は高くないので平塚とよばれ、この一帯の地を平塚郷と称したといわれる。また義家が滞在した所に社殿を建て、影像を奉祀したのが、平塚神社であるという。

これは、平塚神社の所蔵する絵巻物による伝説である。この伝説はともかくとして、豊島城があつたときの鎮守であつたと思われる。ところが城は文明十年、太田道灌と戦い、敗れて城は落ち、豊嶋氏は亡びた。

その後、徳川時代となり、この平塚の里の住人山川城官という人が、当平塚神社を尊び敬い、出世祈願をして江戸に出て、後に校校の職につくことができたので、そのお礼として寛永十一年（一六三四）社殿を再興した。たまたま時の將軍家光が病氣のとき、城官が当社にその平癒祈願をしたことが、その後家光が鷹狩の途中この地を訪れたとき、めかつて、賞としてお寺を再興し、寛永十七年には神社に社領五十石が寄進された。お寺の方は平塚山安樂院城官寺というようになった。

## 西ヶ原一里塚



慶長九年（一六〇四）江戸幕府は諸街道の整備に着手し、その一環として新たに一里塚を築きました。一里塚とは、街道一里ごと、道の両側に築かれた塚のことで、その上には榎が植えられました。一里塚が二本榎とも呼ばれるのはこれによるものようです。西ヶ原一里塚は岩槻街道の二里目の一里塚で、現在、二三区中では、原形のまま保存されている唯一のもので、従って、この二つの塚に挟まれた部分が、江戸時代の岩槻

街道の、このあたりの道幅です。岩槻街道は、日本橋を起点とし本郷追分まで中山道と分かれ、西ヶ原、王子、稻付、岩瀬、川口等を経て岩槻へ出、その先日光街道に合する脇往還で、將軍日光社参の際に將軍一行が用いた道でした。岩槻街道が日光御成道とも呼ばれるのはこれによります。

南側の塚に「二本榎保存之碑」があり、大正初年、東京市が電車軌道延長を計画し、この一里塚が撤廃されるうとしたとき、滝野川町長、渋沢栄一ら町民有志が保存運動をおこし、市当局がこれを受け容れ、塚を避け、軌道を造ることによって保存されるに至ったことなどが記されています。

この電車軌道は、昭和四十六年三月廃止されました。

## 飛鳥山

飛鳥山は、先土器時代、縄文時代、弥生時代の遺跡です。古代から中世にかけての飛鳥山については、詳しくはわかりませんが、飛鳥山は、平塚上の北西につづく丘陵で、石神井川の河口にあたり、北区ではいちばんの高所です。しかも、中世の城づくりには最適な舌状丘陵を形づくっている。平塚城のある平塚神社の丘より、この方がずっと中世の城地に適している。平塚城が飛鳥山までを含めた広大な城であるわけは、いいとおもはれるので、ここ飛鳥山には別の城が存在したと考えるべきである。豊嶋穴はある時、奥にはこの飛鳥山を本城としたのではあるまいか。

この飛鳥山の地は江戸時代の初期から旗本野間氏の所領となりましたが、その後、八代将軍徳川吉宗がこの土地を上地させ、王子権現に寄進、桜を植え一般に開放して以来、桜の名所となりました。

「江戸名所図会」は、飛鳥山について、「数万歩に越えたる芝生の丘山にして春花秋草夏涼冬雪眺めあるの勝地なり。始め元亨年中豊嶋左衛門飛鳥祠を移す……因って飛鳥山の号あり。寛永年中王子権現御造営の時、この山上にある飛鳥祠を遷して、権現の社頭に鎮座なしけり。その後元文の頃台命によって桜樹数千株を植えさせらば、云々と（角川新版より）記しています。

公園内にある「飛鳥山碑」は、豊嶋穴が飛鳥明神を勧請し、熊野にならい王子、飛鳥山、音無川と呼ばれたこと、寛永年中に飛鳥明神を王子権現に移し、吉宗がこの地を王子権現に寄進して、一般の人々に解放した由来を彫っています。

## 金輪寺

現在のこの寺は、旧金輪寺藤本坊です。旧金輪寺は康平年間（一〇五八—一〇六四）、源義家が東征に際し、この地で金輪仏頂の法を修せしめ、凱旋の日、甲冑を奉納して戦死者の冥福を祈つたことに初まると伝えられています。慶長一四年（一六〇九）二代將軍秀忠の命により、宥養上人が、当時無住であつたこの寺院の住職に任せられ、王子権現、王子稻荷社（現在の王子神社、王子稻荷神社）の別当となつたが、万延元年（一八六〇）火災により焼失し、明治初めの神仏分離令によつて庵寺になつたといわれています。旧金輪寺には支坊が六坊（藤本坊、宝持坊、弥陀坊、薬師坊、池上坊、月蔵坊）あつたといわれており、その一つの藤本坊に金輪寺の名を継がせ、王子山金輪寺としたものです。弥陀坊は北区会蔵講りの阿弥陀堂がそれです。

### 三猿鹽石

現金輪寺境内入口に、不動・庚申像がまつられているが、その前の鹽石には文政六年（一八二三）の銘があり、三猿を円形に図案化してあり、更に、周囲の円を三猿それぞれ尻尾で三等分し、変化をつけるなど心憎い出来栄である。

産銘の文字からこの鹽石が庚申塔などに奉納されたものであろうとおもわれる。

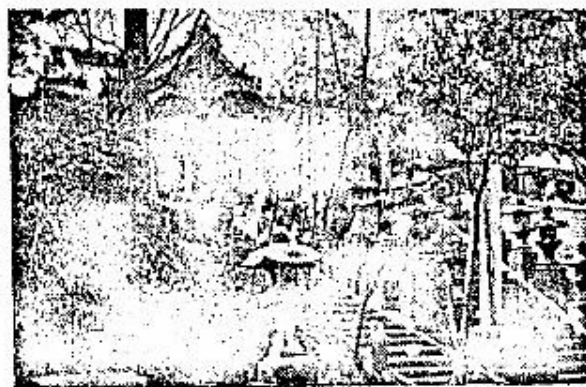


## 王子稻荷神社

祭神は宇気母智神・和久産巢日神・宇迦之御魂神（ウケモチノカミ・ニギハヤヒノカミ・ウケノミタマノカミ）です。もと岸稻荷と称し、創建は不詳ですが、庚申年中（一〇五八～六四）には相当の社格を有していたことが社記にもみられ、古くから稻荷社の関東総社といわれている。また由緒記によると、社殿は三代家光公が寛永十一年（一六三四）に造営し、五代綱吉公は元禄十六年（一七〇三）に、十代家治公は天明二年（一七八二）にそれぞれ修繕を寄進し、更に十一代家齊公は文政五年（一八二二）に社殿を再建された。江戸名所図会（角川新版）等に記載されている「毎年臘時（としごけ）の夜、諸方の命婦この社へ集まり来る。そのともせる火の連なりをみて、明年の豊凶を知る云々」という伝説は有名で、装束後で装束姿となった関東八ヶ国の狐が参詣するという伝承があるところから「元旦に關八州の毛を拾い」というような川柳も残こされている。

拜殿には谷文晁の文政七年の作の竜の天井絵があり、史料館には国の重要美術品「額面着色鬼女図」があります。天保十一年（一八四〇）柴田是眞の作であり、図柄は渡辺綱に切られた片腕を取り返した茨木の図となっている。

二月初午の日には「火防守護の尻守」を授与しています。これをまつると火難を免れるとて人の渦となります。これに因んで当日「尻守」も開かれ、東京の名物にもなっております。



## 王子神社

王子神社はもと王子権現と称え、紀州熊野権現を勧請するというが、豊嶋氏の祖先が豊島荘を經營するに當つて、京都の新熊野社を本所として仰いだので、その分靈を奉祀したのだ、ともいひつてあります。創建の時代は明かにしないが豊嶋氏が代々崇敬して、その造営に力を尽したことはいうまでもない。

表々本豊嶋系図によれば「元享年間（一三二一—一三三三）に豊嶋左近大夫景村が、紀州熊野権現を崇敬して、これを分祠して王子に遷居をまつり、社領として意野川・十条・板橋・西ヶ原・中里・田端・新堀・尾又・谷中・金杉・神和・豊島十二村三千石の地を寄進したとある。この地方に熊野信仰の盛んであつたことは、諸所に今も熊野神社の非常にも多いことでも知ることができる。

この社の境内に、康家と清光を祀る末社が建つていたが、戦災で焼失した。豊嶋氏滅亡後は、小田原北条氏も尊崇し、朱印状を寄せ、神領を寄進している。その後、徳川氏も家康公は社領二百石を寄進し、家光公は権現造りの社殿を造営している。時に吉宗公は紀州の出身で当社に関心深く天文二年（一七三七）飛鳥山を寄進して尊信している。

明治維新後に寔寺となつたが、江戸時代の別当を金輪寺といつて、將軍も立寄つたほどの寺である。この寺の寺宝として豊嶋氏の系図があつた。世に金輪寺本「豊嶋氏系図」というのがこれだ、救ある豊嶋系図の中でも、もつとも基本となつたものである。



## 金剛寺（紅葉寺）

真言宗豊山派の寺院である。この地は、弘法大師遊唐の古蹟で、大師巡錫の折、石神井川にさしかかり、向う岸へ渡る橋がないので、川岸の松の木を切り倒して一本橋を作り、渡らぬと伝えられ、その時、大師言ふ不動明王像を彫り、石の上に安置した。これが同寺の本尊であるという。また、治承年中（一一七七～一一八二）、源頼朝が松橋弁天を信仰し、堂舎を建立、あめせて田園を寄進したが、その後兵火に焼かれ、田園も掠奪され、宗門すら定かでないかつたのを、天文（一五三三～一五五五）のころ阿闍梨宥印という僧がこれと歎いて北条代康に訴え、真言の道場にしたという。

「源平盛衰記」に源頼朝の軍が隅田川を渡って府中に向う途中「武蔵国豊島の上滝野川、松橋という所に陣を取る」と記されてある。

境内には七福神の石仏があるが、これはもと松橋弁天の参道にあつたので、弁天像はありません。松橋弁天というのは、この寺院の西側、崖下にある洞窟に祀られていた、弁天のことである。石神井川の改修で境内に新しく造られて祀られていた。

徳川八代將軍は命じて、寺を甲心に、石神井の流域に紅葉の木を植ゑさせた。この頃から紅葉の名所となり、飛鳥山の桜と共に江戸時代の文人・墨客の杖と曳くところとなつた。

また、この寺院の一带は、豊嶋氏の支族滝野川氏の居館滝野川城跡といわれています。

## 西福寺

豊島町にあつて、真言宗豊山派。清光に關係した、有名な六阿弥陀伝説の第一番の阿弥陀仏を本尊としている。縁起によれば、清光の娘は、年若くして、荒川の対岸の豊城村の専城少輔のところへ嫁いだ。しかし、姑との折合が悪く、その娘はついに荒川の浅間が淵に身を投じてしまつた。五人の侍が、また主人の後を追つた。清光は悲歎のあまり、紀州の高野山に登つて、一心に祈つたところ、夢の告げによつて靈木を得た。こゝを海に投ずると故郷の豊島の地に流れた。折よく巡錫中の行基がこゝへ来たので、清光はこゝに衣履して、六体の阿弥陀仏を造つてもらつた。そして良と侍廿の出生地の寺にそれがい一体ずつを安置し、彼等々の冥福を祈つた。

六阿弥陀詣は、第一番がこの西福寺、第二番 足立郡沼田の延命寺、第三番 豊島郡西ヶ原の無量寺、第四番 同田端の早瀬寺、第五番 下谷の常楽院、第六番 葛飾郡亀戸の常光寺を巡拝するもので、江戸時代後期から明治にかけて江戸の善男・善女によつて、春秋の彼岸には盛んに行つた。

同境内には、当寺住職がサイパン島で集めた遺骨を納めた観音像がある。現地の神社の名をとつて、彩幡観音の名付けられた。また、江戸時代この地を訪れた川越の廻國行者の夫婦が寄進した地蔵がある。この夫婦は橋が流された川でうな嵐の夜にこゝを訪れ、厚いもてなしを受けた。そのお礼に石橋架設の勸進をおこない、この村に石橋を架け、その際に、地蔵をつくつたのである。

六地蔵は、慶応四年（一八六八）の上野戦争で敗走中に殺された彰義隊士を弔つたも

のである。

ここには、高地の民謡「ケオノシラサキ」の主人公「お馬さん」の墓もあり、墓前の赤い欄干が掃部屋橋をあらわしている。

### 参考図書

杉山博純

豊嶋氏の研究

名著出版

寺田正次郎

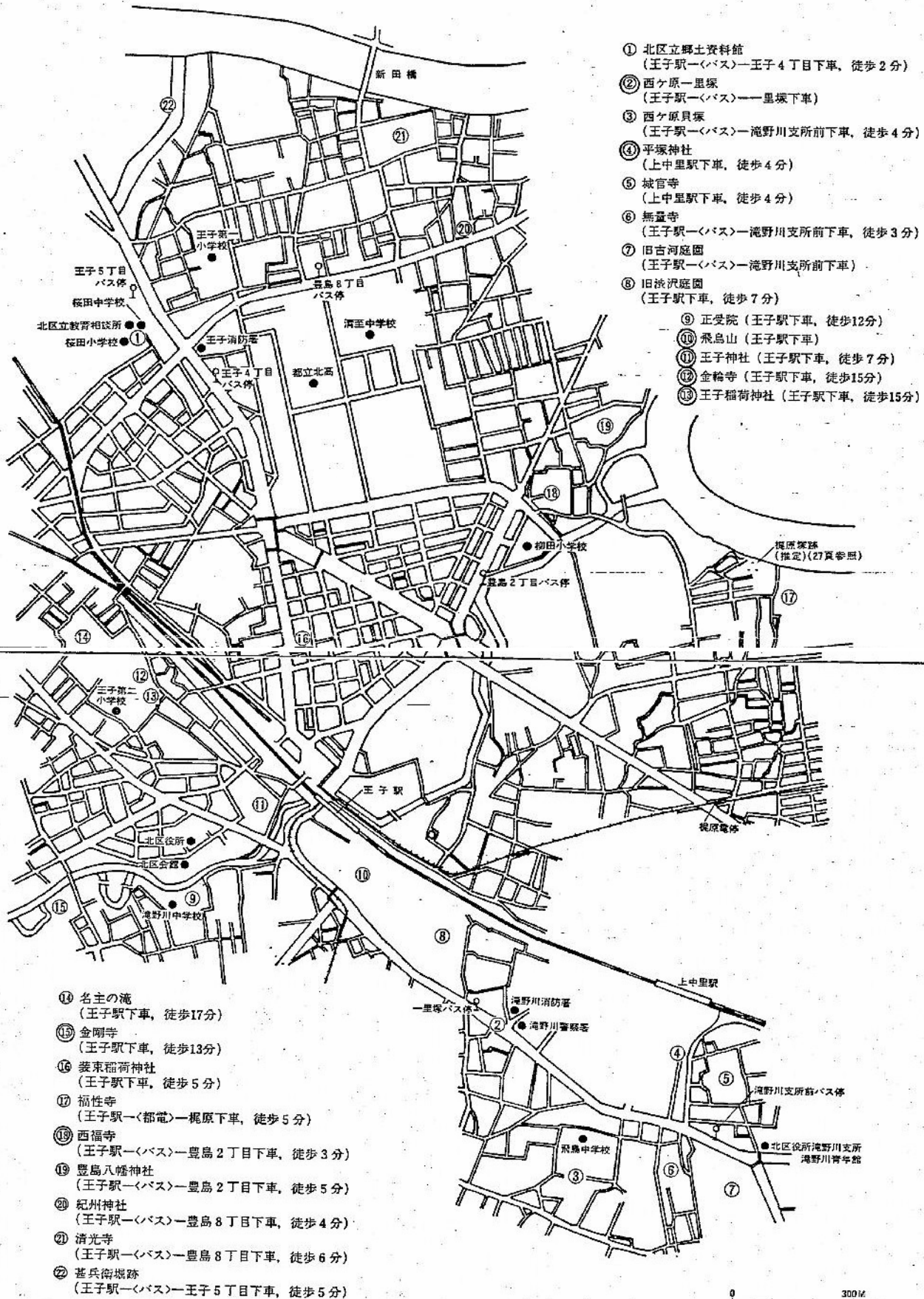
北沢の歴史

名著出版

北沢の歴史と文化誌

北沢教育文化委員会

北区史跡・文化財案内図 (1)



- ① 北区立郷土資料館  
(王子駅—バス)—王子4丁目下車、徒歩2分)
- ② 西ヶ原一里塚  
(王子駅—バス)—里塚下車)
- ③ 西ヶ原貝塚  
(王子駅—バス)—滝野川支所前下車、徒歩4分)
- ④ 平塚神社  
(上中里駅下車、徒歩4分)
- ⑤ 城官寺  
(上中里駅下車、徒歩4分)
- ⑥ 無量寺  
(王子駅—バス)—滝野川支所前下車、徒歩3分)
- ⑦ 旧古河庭園  
(王子駅—バス)—滝野川支所前下車)
- ⑧ 旧泖沢庭園  
(王子駅下車、徒歩7分)
- ⑨ 正受院 (王子駅下車、徒歩12分)
- ⑩ 飛鳥山 (王子駅下車)
- ⑪ 王子神社 (王子駅下車、徒歩7分)
- ⑫ 金輪寺 (王子駅下車、徒歩15分)
- ⑬ 王子稲荷神社 (王子駅下車、徒歩15分)

- ⑭ 名主の滝  
(王子駅下車、徒歩17分)
- ⑮ 金剛寺  
(王子駅下車、徒歩13分)
- ⑯ 菱東稲荷神社  
(王子駅下車、徒歩5分)
- ⑰ 福性寺  
(王子駅—都電)—梶原下車、徒歩5分)
- ⑱ 西福寺  
(王子駅—バス)—豊島2丁目下車、徒歩3分)
- ⑲ 豊島八幡神社  
(王子駅—バス)—豊島2丁目下車、徒歩5分)
- ⑳ 紀州神社  
(王子駅—バス)—豊島8丁目下車、徒歩4分)
- ㉑ 清光寺  
(王子駅—バス)—豊島8丁目下車、徒歩6分)
- ㉒ 甚兵衛堀跡  
(王子駅—バス)—王子5丁目下車、徒歩5分)